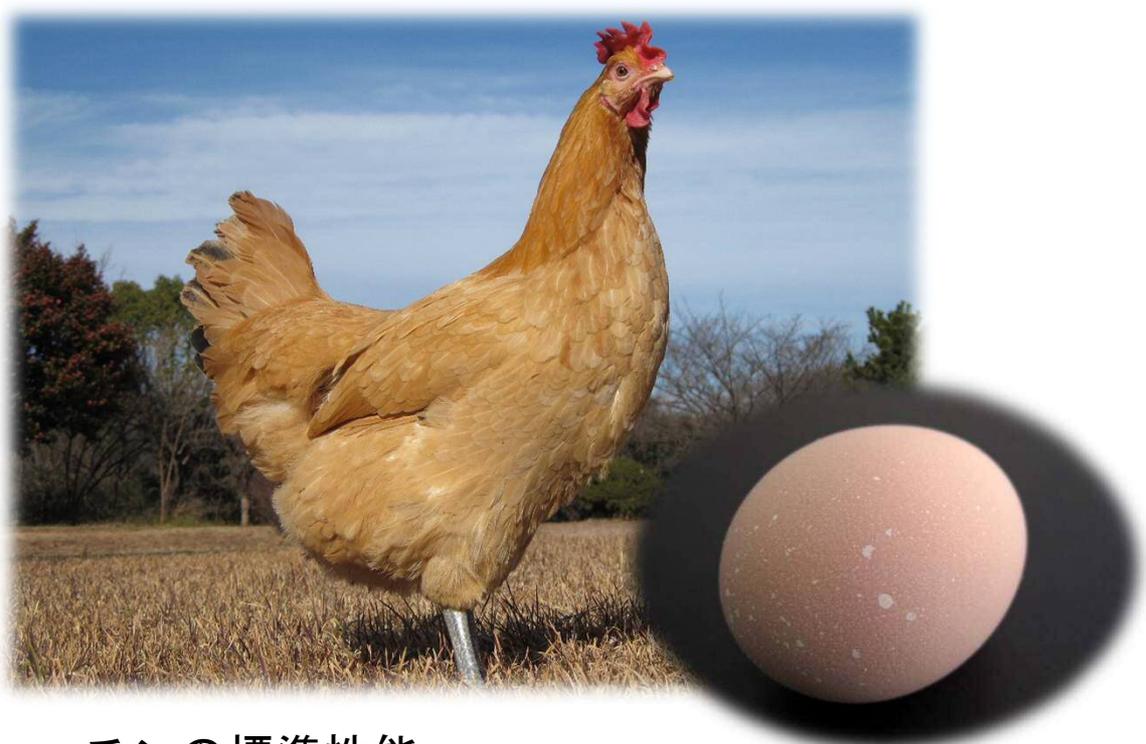


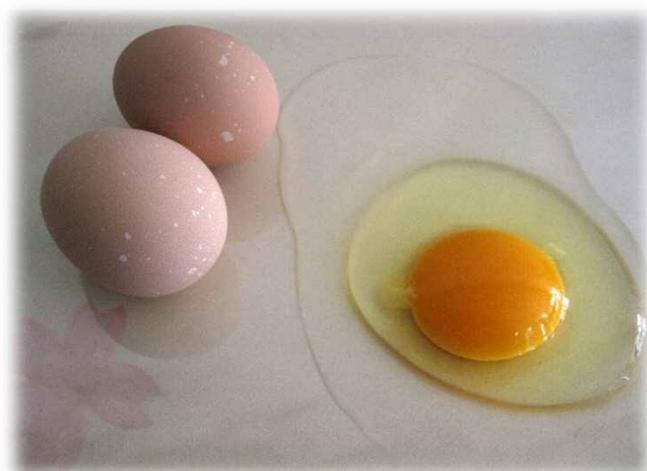
卵用名古屋コーチン



卵用名古屋コーチンの標準性能

育成率(0-150日齢)	99%
生存率*	95%
体重** 150日齢 300日齢	1,900 g 2,480 g
50%産卵日齢	175日
平均卵重*	58 g
ヘンディ産卵率*	71%
日産卵量*	41 g
飼料摂取量*	116 g/羽/日
飼料要求率*	2.8

「卵用名古屋コーチン」は採卵用の名古屋コーチンです。卵殻の色は、白色卵や褐色卵とは異なる桜色で、その多くには卵殻の表面に白い斑点が桜吹雪の様に現れる特徴があります。さらに、卵黄は、色が濃く、旨みとコクのある濃厚な美味しさが特徴です。



ヘンディ産卵率は、期間中の延べ羽数に対する総産卵個数の割合

* 151-450日齢、1羽飼い

** 不断給餌

育成期の体重測定のすすめ



1 体重測定の意義

ヒナの導入から産卵を開始する前までの育成期に体重測定を行うことは、鶏群の成長状態を把握するうえで重要である。さらに、産卵前の雌鶏の仕上がりに状態は、その後の産卵成績を大きく左右する。そのため、体重測定を日常作業の一つに組み入れて育成期の鶏を管理することはリスクマネジメントにもなり、収益の向上につながる。

2 体重測定のポイント

(1) 測定日齢

下表に「卵用名古屋コーチン」の育成期の標準体重を示した。この結果を参考に、発生から30日おきに体重測定を実施することが望ましい。

卵用名古屋コーチンの育成期の標準体重

日 齢	30日齢	60日齢	90日齢	120日齢	150日齢
標準体重(g)	320	820	1,290	1,580	1,900

(2) 測定羽数および体重測定時の注意事項

体重測定は鶏群のバラツキを確認するため、個体ごとに測定する。測定羽数は多ければ多いほど精度は高まる。「卵用名古屋コーチン」の場合、通常、1回の導入羽数の規模が小さいので、30~40羽程度の体重を継続して測定するとよい。

体重測定を行う個体は無作為に選ぶが、体重測定を行うケージを決めて、できる限りいつも同じ個体を継続して測定する。さらに、鶏舎内の位置による体重のバラツキも確認するため、鶏舎内で異なる位置にあるケージを数か所選んで体重測定を行う。

(3) 鶏の状態をチェックする

体重測定で捕鳥した鶏は、見た目や触った状態で成長や健康の状態を観察する良い機会であるので、あわせて確認を行う。

(4) 測定値の利用方法

体重の測定値を用いて、平均値、標準偏差および変動係数を計算する。平均値は、標準体重の数値と比較して、成長の度合いを確認する。変動係数は、標準偏差を平均値で除し、100を乗じたもので、体重のバラツキを確認できる指標である。体重の変動係数は8%以下であれば、その鶏群は個体間のバラツキが少なく、斉一であると判定される。

(5) 育成期における体重管理のポイント

育成期をつうじて標準体重に近づくように管理するが、季節によって体重は変動（夏季は減少、冬季は増加）するので、成長の度合い（平均値）よりも体重のバラツキを少なくすること（変動係数を8%以下）を重視して管理する。ただし、120日齢時の平均体重が標準体重マイナス10%を下回ると、産み出し時期が遅れる傾向があるので、留意する。

3 育雛・育成期における飼養管理のポイント

- ①入雛時の餌付け・給水は丁寧に、ヒナがエサと水をきちんと取っているかよく観察する。
- ②デビューは入雛から1週間前後に実施する。「卵用名古屋コーチン」は下クチバシが伸びやすいので、上クチバシを1/3、下クチバシを1/2焼き切ることを推奨する。
- ③大雛（70~120日齢）時に飼育するケージの床面積は、1羽あたり500cm²以上を確保することが望ましい。
- ④成鶏舎への移動は、120日齢頃までに行うことが望ましい。
- ⑤ワクチンはプログラムに基づいて適切かつ丁寧に接種する。

※「卵用名古屋コーチン」の飼養管理の詳細については、愛知県農業総合試験場のホームページから「卵用名古屋コーチン飼養管理マニュアル（改訂版）」をダウンロードできる。

作成：愛知県農業総合試験場企画普及部広域指導室・畜産研究部養鶏研究室
平成26年度新品種・新技術活用型産地育成支援事業（産地ブランド発掘事業）